

「ハード・ラック」

坂本
絵美

登場人物

米倉 桃子 (27)
成田 冬真 (26)
桜井 貴史 (30)
沢村 舞 (19)
成田 明子 (33)
田中 広美 (29)
多田 一朗 (45)
倉木 早苗 (59)
上田 美穂 (25)
山下 義男 (50)
男子A・B

婚活男性
看護師

フードコーディネーター

警察官

ホームレス

フリーター

成田の姉・無職

食品メーカー会社員

ホームレス

くらき洋品店の店主

OL

警察官

○横浜ベイサイドガーデン

綺麗にカットされたふわふわパーマの
ブードルが海を見つめている。

○同・婚活パーティー会場内

円卓を囲む着飾った若い男女。

女は皆同じゆるふわパーマの髪型。

ゆるふわパーマの米倉桃子（27）が

緊張の面持ちで立っている。

桃子「……」

田中広美（29）が桃子に声を掛ける。

広美「米倉さん何で一人でつつ立ってるの」

桃子「うまくいく気がしません」

広美「婚活パーティー行ってみたって言っ

たのは貴方でしょ。まあ初めてで緊張する

のは分かるけど」

桃子「そうではなく。私本当に恋愛運が残念

なんです」

広美「は？」

緊張して早口で捲し立てる桃子。

桃子「普通に生きていても不運なことがよく起きるんですが、私の残念さは特に恋愛においてその威力を発揮するんです」

○（回想）小学校の通学路

小学生の男子Aと桃子（12）が並んで歩いている。

桃子N「憧れの男子と幸運にも一緒に下校する機会に恵まれれば」

はにかみながら男子Aを見つめる桃子。
幼い少年が走ってくる。

少年「兄ちゃん！ サッカーしてくる！」

男子A「ああ。あんまり遅くなるなよ」

桃子、少年と目が合い、腰を屈める。

桃子「（大人な笑顔で）こんにちほ」

じーっと桃子を見つめる少年。

桃子の口の上には産毛が生えている。

少年「女のくせにヒゲ生えてるー」

凍りつく桃子と男子A。

○（回想終わり）横浜ベイサイドガーデン

桃子「以降、彼は決して私の顔を見ようとし
ませんでした……」

広美「……」

桃子「また、人生で初めてのデートの時も」

○（回想）バッテイング・センター

バッターボックスで空ぶる桃子（17）。

桃子「出来ないように」

バックネットの外で笑顔の男子B。

クネクネと可愛らしく身体を振る桃子。

次の瞬間ドスツと鈍い音がする。

桃子の背中にめり込んでいる白球。

バックネットに顔から突っ込む桃子。

ネットに押しつけられ、すごい形相で

歪む桃子の顔を見て、引きつる男子B。

轢かれたカエルのように倒れる桃子。

桃子N「二度とデートのお誘いはなく、それ
っきりでした……」

○（回想終わり）横浜ベイサイドガーデン

思わず身ぶるいする桃子。

桃子「そしてまたある時は……」

広美「あ、もうけっこう」

桃子・広美「……」

桃子「こんな感じで27年生きてきました」

広美「でも」

桃子「でもせっかくこういう場に来たんです

から、積極的に動かないと損ですよ」

広美「……まあそういうこと」

桃子「広美さんはどんな感じですか？」

名刺をトランプのように広げる広美。

広美「オホホ。本気を出せばざっとこんなも

んよ。まだまだ小娘には負けなくてよ」

桃子「……」

広美「何の為にモテパーマかけてきたの？」

桃子「う……」

広美「周りを見なさい。ゆるふわなのはフア

ッションだけで、中身はハンターよ」

桃子「……行きます」

人の輪から外れている二人の男性に目を向ける桃子。

二人を見比べ、顔の良い方に向かう。

桃子「こ、こんにちはー」

婚活男性「あ、どうも」

桃子「あの、少しお話してもいいですか」

婚活男性「あ、もちろん。いやあ、こういう

所初めてなので緊張してしまっ

桃子「私ものです」

ぎこちない笑顔を交わす二人。

婚活男性「えっと…あ、飲み物持ってない

んですね。取ってきましようか？」

桃子「いえ、大丈夫です！自分で取ってき

ますので」

慌てて飲み物を取りに行く桃子。

テーブルからワインを手に取り、男性

の元に笑顔で戻ろうとする。

と、ヒールが床に滑り、豪快にひっく

り返る桃子。

婚活男性「！」

しんと静まりかえる会場内。

広美「よ、米倉さん！」

そそくさと傍から離れる婚活男性達。

固く目を閉じ、倒れたままの桃子。

桃子N「最悪だ。後頭部が痛い。パンツも見えていいるだろう。どうして私はこうなのだ。残念な星のもとに生まれた自分を呪うべきか。……やはり来るんじゃないかった」

○タイトル「ハード・ラック」

○北町商店街

ワインの零れた服と片方折れたヒール
でとぼとぼと歩く桃子。

道行く人が奇異の目で振り返る。

立ち止り、自分の服を見下ろす。

近くにある『くらき洋品店』に入る。

黒い車が商店街の横に止まり、運転席
から成田冬真（26）が降りてくる。
鍛えられた体つきで、ガラが悪い。

吐しゃ物で汚れた服の匂いを嗅ぎ、

成田「(苛々) うーっ。くっせ！」

○同・くらき洋品店

大阪のおばちゃんが着るような派手な服がぎゅうぎゅうに並んでいる。

服を広げては戻す桃子。

成田の声「(ボソツと) ろくな服がねえな」

蠅に集られ、手で追い払っている成田。

強面の外見に目を逸らす桃子。

無地のカットソーを見つけ、急いで手に取るが、同じ服を成田が掴む。

桃子「(怯え) あ」

成田、一瞬桃子を睨むが、桃子の汚れた姿を見て洋服から手を離す。

桃子「あ、あの。どうぞ」

成田「いいよ。服どうにかしたいんだろ？」

桃子「でも、アナタも汚れてるし」

成田「あ？ 俺のじゃねえよ。なんで俺がこんな店の女物着るんだよ」

成田の迫力に怯えて縮こまる桃子。

成田「あ、いや……」

桃子「本当に、いいんです。別の店に行きますから。すみません」

成田に服を押しつける桃子。

成田「なんで謝るんだよ。こっちだっていいつつってんだろ！」

服を押しつけ合う桃子と成田。

耳元を飛ぶ蠅に苛々し始める成田。

成田「あーもう！ うるっせえな！」

蠅を思い切り手で払うと、勢い余って

棚を殴ってしまう。

恐怖に凍りつき、成田を見つめる桃子。

成田「いや、違う。今のはアンタじゃなく」

服を持ったまま後ずさる桃子。

成田「おい、待て」

桃子「あの、すみませんでした。本当に」

成田「こら。いいか。そこから動くなよ。店から出るんじゃないえ」

益々恐怖にひきつる桃子。

桃子「ごめんなさい！」

成田「待てこらあー！」

服を持ったまま店外に逃げ出す桃子。

棚にぶつかり、財布を落としていく。

成田「（舌打ち）現行犯だぞ、この野郎」

派手な服でレジに座り、煙草を吸って

いる倉木早苗（59）。

早苗「アンタが脅すからじゃないの？」

成田「……」

早苗「五千元」

成田に手を差し出す早苗。

成田「五千元!? あのシャツ一枚でか！」

早苗、シャツがあった棚までいき、だるだるの長ズボンを取り出す。

早苗「あれ寝巻だから」

成田「……」

○北町緑地公園

全速力で逃げてくる桃子。

後ろを確認し、ベンチに座りこむ。

安堵して息を吐き出すが、ハッと手に持っている洋服に気づく。

桃子「やばっ！」

店に引き返そうと、バッグを探る。

桃子「あれ？ 財布！ 財布がない！」

○（フラッシュ）くらき洋品店

棚にぶつかり、財布を落とす桃子。

○北町緑地公園

桃子「ウソー！」

おろおろと頭を抱える桃子。

桃子「一張羅は汚すわ、パーティーで恥はかくわ、ヤンキーに絡まれるわ、財布は落とすわ！」

がつくりと項垂れる桃子。

桃子「しかも万引きしちゃうなんてく！」

手に持った服を見つめ、

桃子「……前科ついちゃうのかな」

膝に顔を埋める桃子。

桃子「もう嫌。何でいつつもこうなの」

桃子の肩に上着がかけられる。

桜井の声「大丈夫？」

顔を上げると桜井貴史（30）が心配そうに立っている。

桜井を食い入るように見つめる桃子。

桜井「汚れてるし、靴も壊れてるね」

恥ずかしそうに服を隠す桃子。

桜井「良かったらこれ着て帰って。ないより

マシでしょ？」

桃子「悪いです！ アナタが寒いでしょ」

桜井「（笑顔で）慣れてるから平気」

桃子「……」

桜井「じゃあね」

桃子「あ、待って！ 携帯！ 連絡先教えて

下さい！ お礼がしたいので！」

桜井「ああ、別にいいよ。気にしないで」

桃子「私の気が済まないの。ぜひ！」

桜井「んー……でも。携帯持ってないから」

桃子「え？」

少し考え込む桜井。

桜井「この先に図書館があるの知ってる？」

桃子「はい」

桜井「僕、たいていそこにいるから。気が向いたら返しにきてよ」

桃子「あの、じゃあ週末、土曜日は！」

桜井「うん。分かった」

笑顔で手を振り、立ち去る桜井。

桃子「……」

○サンライズマンション・桃子の部屋（夕）

1DKの部屋に入ってくる桃子。

壁には『七転び八起き』『あきらめたらそこで試合終了』等、前向きな言葉の半紙が至る所に貼られている。
俯き、桜井の上着を見つめる桃子。

桃子「くっ。くふっ。うふふふ」

満面の笑みで小躍りしだす桃子。

桃子「あははははは」

○北町総合病院・精神科・401号室

成田が部屋を出てくる。

成田「（中に）じゃあ、着替えてる間、俺向
こちらの待合室にいるから」

ドアを閉め、くらき洋品店の袋に入っ
ている寝巻のズボンを見て、溜息。

待合室に向かう成田。

壁には「精神科」の案内表示。

○北町交番・前のバス停（朝）

緊張した面持ちで仕事の資料を捲りな
がらバスを待つ桃子。

すぐ後ろに北町交番があり、入口に制
服警官が立っている。

桃子「『笑われて、笑われて、強くなる』

『出来る事から一歩ずつ』」

ぶつぶつと独り言を唱える桃子。

○ホテル・グランブール

高級ホテル。

○同・レストラン

従業員が座る丸テーブルの前に、彩り鮮やかなフレンチが並んでいる。

皆の前に立ち、プレゼンする桃子。

桃子「スプリングフェアということで、春らしい色鮮やかな果物を使用した料理をメインにしました。また、お客様に香りでも春を感じて頂くため、デザートにはバラのアイスを用意しましたのでご賞味下さい」

料理を口に運び、顔を綻ばせる人達。

笑顔になる桃子と、会場後ろに立ち、

様子を見ている広美。

○同・ロビー

疲れて座る桃子に広美が声を掛ける。

広美「だいぶ感触良かったわね。さすが米倉

さん！ ありがとう」

桃子「お役に立てて良かったです」

広美「それにしても」

桃子「……」

広美「この間は（吹き出し）大変だったね」

桃子「……いいんです。慣れてますから」

広美「いやあ、三年一緒に仕事してるけど、

ああいう一面は初めて知ったわ」

桃子「……」

思い出し笑いで肩を震わせる広美。

広美「仕事もできるし、プレゼンではあんなに堂々としてるのにねえ」

桃子「……恥のかき過ぎでメンタルだけは強くなつたみたいです」

広美「料理上手は恋愛上手って嘘なのね」

再び笑い出す広美。

桃子「（小声で）いいんです。やっと王子様見つけましたから」

広美「何か言った？」

桃子「いいえ」

菓子折りを持って立ちあがる広美。

広美「朝から思ってたけど、それ何？」

桃子「これは、その……」

○北町商店街・くらき洋品店（夕）

菓子折りを持った桃子が入ってくる。

桃子「（恐る恐る）御免下さい」

早苗「いらっしやい。おや」

桃子「あの、昨日……」

早苗「ああ、覚えてるよ」

桃子「大変申し訳ありませんでした！」

早苗「まあ一部始終見てたしね」

桃子「あの、お洋服の代金と、あとこれつま

らないものですが」

早苗「オホッ、悪いわねえ。こっちはありが

たく貰うけど、代金はいいよ」

桃子「え？」

早苗「昨日の兄ちゃんが払ってくれたから」

桃子「あの人がですか!？」

早苗「そ」

桃子「（意外）……、あ！ あの、あと財布、

落ちてませんでしたか？」

早苗「……」

桃子「……やっぱりないですよね」

早苗「あの兄ちゃんの伝言で、財布を返して欲しかったら北町交番に行けってさ」

桃子「え、届けてくれたってことですか？」

早苗、すでに菓子折りに夢中。

お礼を言っって店を出る桃子。

桃子「てっきり持ってかれたと思ったんだけど。良い人だったのかな」

○北町交番（夕）

右往左往してようやく中に入る桃子。

制服警官の山下義男（50）がいる。

山下「何かご用ですか？」

桃子「あの、財布を落としまして。ここに届けられたと聞いたものですから」

山下「どうぞ。座って下さい」

桃子「……」

山下「落とした財布の特徴と場所を教えてください」

桃子「黄色い長財布です。この近くの商店街にある『くらき洋品店』で失くしました」

山下「あー、これですか？」

桃子「！ それです！ 私のです！」

山下「そうですね。ただ……この財布の持ち主が万引きをしたという話もありまして」

桃子「！」

奥から制服を着た成田が出てくる。

桃子は正体に気づいていない。

山下「代金を支払わずに逃げたとか？」

桃子「ち、違います！ あれは不可抗力で！

ものすごい柄の悪い不良に絡まれたんです。

それで怖くなって」

成田「……不良？」

桃子「よく分からないんですけど絡まれて、

謝ったんですけど、壁殴ってきて」

成田「あくまで盗む気はなかったと？」

桃子「もちろんです！ 服屋さんにもお詫び

に行ってきましたし、とにかくその不良が

怖くて無我夢中で逃げちゃっただけで」

成田「全部その不良のせいだと？」

桃子「そ、そう！ ……かな？」

成田「代金支払ってやったのに随分ですね」

桃子「え？」

成田が帽子を取り、やっと気づく桃子。

桃子「昨日の！」

成田「今回は嚴重注意で終わるが、次はないからな」

成田を凝視する桃子。

成田「何」

桃子「警察の方だったんですか」

成田「そう」

桃子「……見えませんね。どっちかというところ
捕まえられる側というか」

成田「嚴重注意だけで終わりたいみたい
だな」

桃子「い、いえ！」

桃子に財布を渡す成田。

桃子「ありがとうございます。あ、代金を」

成田「いいよ、別に」

桃子「いえ！それはさすがに」

成田「いや、あれ上下でワンセットなんだ。」

下は俺が持って帰ったから」

桃子「え？ そうなんですか？」

成田「ああ」

桃子「……着てるんですか？」

成田「着るかよ」

桃子「それじゃあやっぱり代金払います」

成田「いいって言ってるだろ」

山下「はいはい、成田もそれぐらいで」

桃子に書類を差し出す山下。

山下「これ書いて下さいね」

桃子「あ、はい」

成田「パトロール行つてきます」

桃子「あの！ ありがとうございます」

成田「……いいえ」

交番を出て行く成田。

桃子「成田さん……無愛想な人ですね」

山下「そうだねえ。お嬢さんにはとりわけ口

が悪いな。すみませんね」

桃子「いいんです。私が悪かったので」

○横浜市立北町図書館

一人で本を読む桜井を見つける桃子。
素早く髪型をなおし、リップを塗る。

桃子「……」

桜井「（小さく笑って）声掛けないの？」

桃子「！ すみません。気づいてました？」

桜井「そりゃああれだけ見つめられたらね」

照れ笑いする桃子。

桜井「服持ってきてくれたんだ？」

桃子「はい。ありがとうございます」

笑顔で応じる桜井。

桜井・桃子「……」

桃子「あの、私米倉桃子といいます。改め
て、助かりました。ありがとうございます」

桜井「桜井貴史です。どういたしまして」

桜井・桃子「……」

桃子「あ、お邪魔でしたよね。すみません」
頭を下げながら、後ずさりする桃子。
帰ろうとするが、振り返り、思い切っ
て桜井に声を掛ける。

桃子「あの！ お昼まだですか？ 良かったら、い、いい一緒にどうでしょうか」

桜井「ごめん。今、持ち合わせがないんだ」

桃子「お礼ですから、おごらせて下さい」

桜井「え？ いいの？」

桃子「はい！」

○イタリアンレストラン『グラッツェ』

高級な雰囲気。周りの客は外人だらけ。

オーブンテラス席に座る桃子と桜井。

桜井「ここのピザすごく美味しいからぜひ食べてみて」

桃子「（苦笑い）あ、はは」

隠れて財布の中身を確認する桃子。

メニューを見るとランチの平均二千円。

桃子「……」

スタッフに話しかける桜井。

桜井「すみません。このワインを……」

桃子「……」

○同・女子トイレ

桃子「確かに奢るとは言ったが普通ワインまで頼むか？　しかしあれ程のイケメン……」

洗面台の前でぶつぶつ独り事を言う広美を奇異の目で見る客。

○同・オープンテラス席

テーブルの上には空のワインのボトルが二本。ほろ酔いの桜井と桃子。

桜井「ピカソの絵は色々な角度から見た物の形を展開図のように画面に再構成しているんだ。だから目は正面にあるのに鼻が横向きだったりするんだよ」

桃子「すごい。芸術の造形が深いんですね」

桜井「好きなだけだよ」

桃子、生ハムに手を伸ばすがきちんと切れておらず大きい固まり。

無理に頬張るが噛み切れない。

生ハムを啜えたまま苦笑いする桃子。

悪戦苦闘していると、勢いで噛み切っ

た生ハムが桜井の方へ飛んでいく。

桜井の顔に貼りつく生ハム。

桃子「！」

桜井「……」

周囲にいた客がクスクス笑いだす。

桃子N「終わった……」

桜井、顔についたハムを食べると、笑っている外国の客に笑顔で返す。

桜井「（英語）このハム、すごくおいしいからオススメですよ」

外人の客に親指を立てられる桜井。

桃子「……」

桜井「（笑顔で）ワインと合うね」

桃子「は、はい」

ワインを飲む桜井を見つめる桃子。

○北町緑地公園（夕）

ゆっくりと散歩している桜井と桃子。

桜井「今日は御馳走様」

桃子「いいえ。こちらこそ楽しかったです」

桃子・桜井「……」

桃子「あの、良かったらまたまたこうしてお食事

とか一緒に……」

桜井「あ、ここ。俺の家」

桃子「え？ どこです……か」

目の前にはブルーシートのテント。

桃子「……」

パトロール中の成田が通りかかる。

ホームレス達に声を掛けて回る成田。

桜井「あ、おまわりさん」

成田「アンタ、また女の人連れこんで……」

桃子に気づき、ギョツとする成田。

呆けた顔で立ち尽くす桃子を見て何か

を察する。

成田「ご愁傷様」

桃子に呟き、立ち去る成田。

○桃子の部屋・キッチン（朝）

ぼんやりおにぎりを握っている桃子。

桃子「ホームレス……」

出来上がった弁当を眺め、溜息。

桃子「いや。人を地位やお金で判断するなんて最低じゃない？」

奮起するようにおにぎりにかぶりつく。

書道道具を取り出し、『財布が軽けれ

ば、心は重い』としたため、壁に貼る。

桃子「そうよ。大事なものは人間性でしょ」

弁当を持ち、意気込んで家を出る。

○コアマンション・前の道（朝）

弁当を持って歩いている桃子。

美穂の声「なんで!？」

上田美穂（25）が成田の腕に縋る。

成田に気づき、思わず足を止める桃子。

美穂「私何か悪いことした？」

成田「別に」

美穂「じゃあどうして急に別れ話になるの」

桃子「……」

美穂「結婚の話を出したから？ 別にすぐじやなくてもいいの」

成田「すぐもいずれもない」

美穂「冷めたの？ どうして？」

成田「お前が本気になったから」

成田を引っ叩く美穂。

桃子「！」

マンション中に駆けていく美穂。

桃子「……」

俯いていた成田が顔を上げると、桃子が責めるように見ている。

成田「……またアンタですか」

桃子「叩かれて当然だと思います」

桃子の弁当に目を向ける成田。

慌てて隠す桃子。

成田「（鼻で笑い）なるほど」

桃子「な、なんですか」

成田「理解できんな。ホームレスと知ってなんでまだ会おうとするのか」

桃子「人間お金じゃありませんから」

成田「顔か」

桃子「か、顔でもありません」

成田「じゃあ性格だとしても？ あの若さで仕事を探しもせずにホームレスに甘んじているような奴だぞ？」

桃子「……」

成田「言つとくが、奴の外見に騙されて貢いでる女はアンタだけじゃないからな」

桃子「（シヨック）……」

成田「どうして女ってのは恋愛するとまともに頭が働くなるんだ？ 教えてくれよ。あんな男に入れあげたら不幸になる事ぐらい分かりきってるだろう」

桃子「う……」

成田「あいつだけは違うと？ いずれホームレスから脱却して自分だけを見て幸せにしてくれるって？」

桃子「そういう可能性もゼロではないと……」

成田「（舌打ち）馬鹿か」

桃子「馬鹿!？」

成田「女は恋愛になるとすぐに男に依存し、四六時中相手の事で頭がいっぱいになる。」

他に考える事ないのか？」

桃子「依存じゃありません！好きな人がいたら今何してるかな、会いたいなって思うのは自然な事じゃないですか！」

成田「俺なら御免だね。そんな他人に左右される人生」

桃子「大好きな人の笑顔を思い浮かべて幸せになったりしないんですか!？」

成田「恋愛脳でドロドロツの笑顔を向けられるとゾツとするね」

啞然とする桃子。

成田「忠告はしたからな。せいぜい馬鹿を見ないようにやることだ」

桃子「警察官が市民にそんな言い方していいんですか!？」

成田「今日は非番だ」

背中を向ける成田を悔しげに睨む桃子。

○北町緑地公園

怒った様子で歩く桃子。

桜井のテントから沢村舞（19）が出てくる。

舞「じゃあ、また明日ね。タカくん」

すれ違い様、冷たく桃子を睨む舞。

桃子「……」

桜井「あれ？ 桃子ちゃん。おはよう」

桃子「おはようございます……」

桜井「僕に会いに来てくれたの？」

桃子「ええ。まあ」

桜井「入って、入って」

桃子をテントに招き入れる桜井。

離れた場所でその様子を見ている舞。

○同・テント・中

桜井の描いた絵がそこら中に散乱。

抽象的過ぎる絵に首をひねる桃子。

新品の服が端に積んである。

桃子「……」

桜井「それね。さっきの子がくれたの」

桃子「全部ですか？ けっこうな額じゃ……」

桜井「僕に似合いそうだからって。イイ子だ

よね」

桃子「……」

桜井「今日はどうしたの？」

桃子「あ、これ。お腹空いてるかと思って」

桜井「わあ。さっきから良い匂いするな、て

思ってたんだよ。ありがとう」

桃子「え、えへ」

弁当を広げる桜井。

桜井「全部桃子ちゃんが作ったの？」

桃子「はい」

桜井「すごい。良い奥さんになれるね」

桃子「いやあく。えへへへ」

桜井「どれが自信作？」

桃子「え、えつとー。これかな」

桜井「あーん」

桃子「え？」

桜井「食べさせてよ」

桃子「！」

震える箸で料理をつまむ桃子。

桃子「あ、あーん」

横からホームレスの多田一朗（45）が
顔を出し、桃子の箸の料理を頬張る。

桃子「！」

多田「うまい！」

桜井「ちよつとー。一朗さん」

多田「いや、通りかかったらただならぬ雰囲気
気を感じてよ。こりゃ邪魔しねー訳にはい
かねーってよ！」

豪快に笑う多田。

桜井「この人、お隣の一朗さん」

桃子「隣……」

多田「どうも」

桜井「一朗さんも食べる？」

桃子「え！」

多田「悪いね。ご相伴にあずかろう」

桜井「ここでは皆、一蓮托生だから」

多田「宴会をやってええんかい？」

愛想笑いをする桃子。

多田「お。いいねこの子は。最近来た女の中

で一番愛想が良いんじゃないかねえか」

桃子「……そんなに来てますか」

桜井「皆イイ子達だよ」

多田「いやいや、何だっけ？ 最近懐いてる、

あの、さつき洋服持って来てた」

桜井「舞ちゃん？」

多田「それだ。ちーつとも愛想がねえばかり

か、わざとらしく俺を邪険にしてよお」

桜井「親父ギャグばっか言うからでしょ」

多田「やっぱ若過ぎるとダメだな」

桃子「舞ちゃんはいくつなんですか？」

桜井「19？ て言ってたかな」

多田「心配すんな。女は姉ちゃんみたいに臺

が立ったぐらいが一番よ」

桃子「（ショック）……」

桜井「僕の客に失礼な事言わないでよ！ 広

美ちゃんは若いしすごく可愛いからね」

言いながら桃子の頭を撫でる桜井。

桃子「！」

多田「出たよ。おい、姉ちゃん騙されんなよ。

って、もう遅いか。わははは」

桜井「ちよつと手洗ってくる」

テントから出て行く桜井。

桃子「あの、聞いてもいいですか」

多田「おう。（おかずを指し）それもくれ」

桃子「桜井さんはどういう人なんですか？」

多田「見たまんま」

桃子「それだと分かりません」

多田「俺だって知らねえよ。奴の素性に興味

ねえし。まあ、あれだな。一言で言う」と

桃子「？」

多田「現代の貴族」

桃子「……」

多田「今ホームレスなのに？ て顔したな」

慌てて首を振る桃子。

多田「そうじゃなく、精神性の問題よ」

桃子「はあ」

多田「労働に興味がなく、自分の好きな事だけして生きてる。生来の性格もあるだろうが、貢ぐ女が次から次に出てくるからこん

な生活も苦と違ってねえな。たぶん」

桃子「……」

多田「でもどれか一人の女の家に移り込んでヒモ生活するのは嫌みたいだなあ。縛られんのが嫌いなんじゃないか？」

桃子「……そう、ですか」

溜息をつく桃子。

多田「あ、でも最近ごそつと来る女は減ったな。今通ってるのはあの舞って子とアンタぐらいじゃないか？」

桃子「そうなんですか？　なんで？」

多田「知るかい」

桜井「ただいまー」

桃子「あ。おかえりなさい」

多田と桃子の間に割って入る桜井。

多田「何だよ。狭えな」

桜井「（桃子の肩を抱き）近過ぎ。離れて」

桃子「（嬉しい）……」

○北町総合病院・精神科・401号室

成田明子（33）が嘔吐している。

明子の背をさすってやる成田。

口を拭い、弱弱しく笑う明子。

明子「ごめんね。忙しいのに」

成田「……いや、気にすんなよ」

明子の腕を見て、

成田「また痩せたな。病院食まずい？」

明子「……」

成田「具合悪いか？ 看護師さん呼ぶ？」

明子「……お酒買ってきて」

成田「駄目だ」

成田・明子「……」

ふいに豹変し、成田に殴りかかる明子。

明子の腕を止める成田。

明子「買ってこいよ！ 誰が今まで世話して

やったと思ってるんだ！」

成田「（静かに）やめろ。姉ちゃん」

明子「お父さん達が死んだ後、大学生だった

私が一人でアンタを育ててやったのよ！

どんだけ大変だったか分かる!？」

成田「……ああ」

看護師「成田さんどうしましたー？」

明子を落ち着かせる看護師。

哀しそうに明子を見つめる成田。

○北町交番・前のバス停（夕）

仕事帰りの桃子がバスから降りてくる。

上機嫌で歩いているが、交番に立つ成

田と目が合い、緊張する桃子。

ぼんやりした成田が桃子に会釈する。

桃子「！」

恐る恐る成田に近づく桃子。

桃子「どうかしたんですか？」

成田「？」

桃子「なんか元気なさそうに見えますけど」

成田「……」

桃子「あ、そうだ」

ラッピングされたマカロンをバッグか

ら取り出す桃子。

桃子「良かったらこれ。洋服の代金のお礼も

まだでしたし。ちょっと作り過ぎたので」

ちらつと見るだけで受け取らない成田。

桃子「味は保証しますよ。こう見えて職業フ

ードコーディネーターなんです」

成田「女の手作りは嫌いだ」

桃子「（イラッと）ああそうですか」

成田「ホームレス男へのプレゼントか？」

桃子「……」

成田「……なあ」

桃子「説教ならけっこうです」

背を向け、歩き出す桃子。

成田「あんまり男を信用し過ぎるなよ」

穏やかな声音に振り返る桃子。

成田「アンタ、年の割に恋愛経験少なそうだから」

見透かされ、気まずい桃子。

成田「そういう奴が男に裏切られると目も当てられないぜ。発狂して、男につきまとい、訴えられる。挙句の果てには酒に依存するようになり、最後は精神病院行きだ」

桃子「（怪訝な顔）それ誰の話ですか？」

成田「アンタの未来の話」

苦い笑みを浮かべる成田を見つめ、

桃子「……あの、やっぱりどうぞ。甘い物食べると元気になりますよ」

成田「いらない」

桃子「人の好意をとことん無にする人ですね。もういいですよ」

肩をいからせて立ち去る桃子。

○北町緑地公園・桜井のテント・中（夜）

マカロンを食べている桜井。

桜井「おいしいね。ありがとう」

桃子「えへっ。良かった」

桜井「そうだ！ ちょっと待ってね」

スケッチブックを取り出し、1分程度で桃子の肖像画を描き上げる桜井。

桜井「はい」

桃子「……。あ！ 私ですね！」

桜井「いつもご飯貰ってるから、お礼」

桃子「ありがとうございます」

微笑み、見つめ合う二人。

桜井の顔がだんだん近づいてくる。

思わずギュッと目を閉じる桃子。

桜井「……もう暗くなってきたし、そろそろ

帰った方がいいんじゃない？」

桃子の後ろの入口から外を見る桜井。

桃子「……そうですね。そうします」

○同・桜井のテント・外（夜）

桜井に手を振りテントを後にする桃子。

上着のポケットに入れた桜井の絵を大

事そうに撫でる桃子。

桃子N「初めて男の人にプレゼント貰ってし

まった」

ウキウキと歩き出す桃子。

桃子N「しかも手作り！ どうしよう！」

浮かれてスキップする桃子を、公園隣のアパートの一室から双眼鏡が覗いている。

○北町緑地公園・前の道（朝）

仕事に向かう桃子。

期待を込めて桜井のテントを見るが、

桜井が出てくる気配はない。

諦めて前を向くと、交番の入口に立つ

成田が見える。

桃子「……」

当たり屋のように肩をぶつけてくる舞。

桃子「ぐえ」

舞「痛い」

桃子「ごめんなさい。（舞に気づき）あ」

舞「……一回会っただけなのに、舞の事、覚

えててくれたんだ」

桃子「ええ、まあ」

舞「なら話は早いわ。ちよっと一緒に来て」

桃子「あ、でも私今から仕事に……」

手にナイフを持っている舞。

桃子「……」

桃子の肩を押し、強引に連れて行く舞。

○北町交番（朝）

入口で見張りをしている成田。

険悪な雰囲気の桃子と舞に気づく。

公園に行こうとするが、躊躇する。

女A「すみません。この辺に朝日ビルってありますか？」

成田「あ、はい」

○市川ハイツ・二階・舞の部屋（朝）

北町緑地公園の真横にあり、ベランダからは桜井のテントが見える。

桃子「ここ、舞ちゃんのお部屋？」

舞「そうよ。引っ越したの。ここならいつでもタカ君と一緒にいれるでしょ」

机の上には双眼鏡がのっている。

桃子「……」

舞「今何考えてるか当ててあげようか」

桃子の足を踏みつける舞。

舞「ストーカーじゃねえよ。舞とタカ君は恋人同士なんだから」

ごくりと唾を飲み込む桃子。

桃子N「私の不運さは特に恋愛においてその威力を発揮するのだ」

○北町交番（朝）

公園の方を気にしている成田。

老婆A「あのお」

成田「はい？」

老婆A「さつき喧嘩してる女連れがいてね。

少し太めの子と可愛い今時な感じの子」

成田「……はい」

老婆A「見間違いかもしれないんだけど、若い子の方が太めの子の方にこう、ナイフ？
みたいなのを当ててアパートに連れこんで
たんだよ。大丈夫かなあとと思って」

成田「どこですか!？」

○市川ハイツ・二階・舞の部屋（朝）

桃子「最近桜井さんの周りから女がいなくな
ったって一朗さんが言ってたけど。舞ちゃ

んが何かやったの？」

舞「人の恋人に手出す女なんて何されても文句言えないんだから」

物が全くない1DKを見回す桃子。

部屋の一角に唯一、アニメグッズやゲ

ーム、漫画が並んだ棚がある。

壁に桜井の描いた絵がかけてある。

抽象的だが舞の肖像画のよう。

桃子「……桜井さんと付き合ってるの？」

舞「タカ君は舞の理想なの。初めてリアルで人を好きになれた」

桃子「でもホームレスだよ？」

舞「アンタも知ってて好きなんでしょ？」

桃子「でも、舞ちゃんまだ十代だし」

舞「全部関係ない。舞がもっとバイト増やして食べさせてあげるから」

桃子「……でも、そういうのは違うんじゃない？」

舞「『でもでも』うるさいなあ。愛に正解なんてあるの？」

桃子「……」

舞「アンタが出来ないだけでしょ」

桃子「……」

舞「だったら近づかないで。舞のタカ君への

愛は本物だから」

インターホンが鳴る。

桃子・舞「！」

無視する舞。激しくドアを叩く音。

成田の声「沢村さーん！ 警察です」

桃子「！（眩き）……成田さん？」

舞「声出したら許さないから」

桃子にナイフをちらつかせ、玄関に続

く部屋のドアを閉める舞。

桃子「……」

○同・玄関（朝）

玄関のドアを開ける舞。

舞「何？」

成田「ちよっと通報がありました。今お一人

ですか？」

舞「一人よ」

成田「中を改めさせてもらってもいい？」

舞「（玄関を閉めながら）嫌よ。帰って」

成田「ちよつと失礼」

玄関に足を入れ、強引に中に入る成田。

舞「ちよつと！勝手に入らないで！」

奥のドアを開けて飛び出す桃子。

桃子「成田さん！」

焦ってスタンガンを取り出し、成田に
数秒当てる舞。

成田「ぐわっ！」

崩れ落ちる成田の頭を庇う桃子。

慌てて玄関のドアを閉め鍵を掛ける舞。

舞「すごい。初めて使ったけど本当に効くの

ね。これ」

痛みに耐える成田を抱える桃子。

○同・キッチン

後ろ手に縛られている成田と桃子。

成田「あー。まだ頭が朦朧とする」

桃子「……成田さんがくるまで縛られてなか

つたのに」

成田「な、なんだよ。その言い草」

桃子「事態は悪化しました」

成田「この野郎。助けにきてやったのに」

桃子「だいたい情けないですよ。大の男が、しかも警察官のくせにあんな小娘にいいようにされちゃって」

成田「不意打ちでスタンガンくらったんだぞ！ すげえ痛かったんだからな」

舞「五月蠅い！ 勝手に喋らないで！」

成田「……俺達をどうする気だ？」

イライラと爪を噛む舞。

成田「考えてないんだろ」

舞「そ、考えてるわよ！ ナメないでよね」

桃子「現役警官まで縛り上げちゃって。大事になるよ」

舞「……アンタが悪いのよ。舞のタカ君にちよつかい出すから」

成田「だからって他人を傷つけていい理由にはならないだろう。立派な犯罪だぞ」

舞「……」

成田「惚れているならまずは本人にその気持ち
をぶつける。話はそれからだろ」

舞「……告白したわ。ちゃんと」

桃子「！」

舞「そしたら、『ありがとう』って言って、
あの絵をくれたの」

桃子「……」

舞「これって舞を受け入れてくれたって事
でしょ？ 私達付き合ってるのよね？」

桃子「男性側の意見を下さい」

成田「え！ いや……」

女二人の真剣な眼差しに焦る成田。

成田「とにかく！ 束縛すると男は逃げる
けどぞ。自分意外の人間関係全てに嫉妬す
るなんて愚の骨頂だ」

舞「……」

桃子「でも成田さん」

成田「……」

桃子「『分別を忘れないような恋は、そもそ

も恋ではない』とトーマス・ハーデーも
言っています」

成田「お前はどっちの味方なんだ！ そし
て誰だよそれ」

舞「……嫌よ。絶対に渡さない。この人だっ
て感じたんだもん」

桃子「舞ちゃん……」

舞「……イイこと思いついた」

突然、成田の服を脱がし始める舞。

桃子「（少し嬉しそう）え？ え？」

成田「こらこら。何やってんだ」

舞「二人を全裸にして玄関から放り出すの」

成田「はあ!？」

桃子「全裸!？」

舞「で、不審者がいるって通報してやる。そ
したら舞が捕まることはないし、アンタ達
も懲らしめてやれるし、一石二鳥でしょ」

成田「ふざけるんじゃない！ 放せ！」

舞「うふふ。警察官が全裸でうろうろしてた
ら懲戒ものよ。言い訳なんかきかない。こ

の女も痴女確定。私は変態カップルの被害者ってわけ」

桃子「あ、頭いい……」

成田「アホか！ お前も何感心してんだ！」

楽しそうに成田を脱がしていた舞。

シャツを脱がし、成田の上半身が裸になったところで、

舞「きゃー！ いやー！」

成田から飛び退く舞。

桃子「どうしたの!? 成田さん！ いたい

けな十代の少女に何やったんですか！」

成田「な、何で俺が責められないと……」

舞「胸毛が生えてるー！」

成田「へ？」

前にまわって確認する桃子。

桃子「ぎゃー！ ギャランドウも生えてる

ー！」

舞「いやー！ 見せないでー！」

成田「な、何なんだお前らは！ ふざけてんのか!?」

身体の痺れが取れ始めている成田。

成田「くそっ」

舞に足払いをかけ、のしかかる成田。

舞「いやあー！ やだやだ！ 気持ち悪い

ー！ 毛が顔に当たってるー！」

桃子「成田さん。何てことを」

成田「何て事を、じゃねえんだよ！ お前も

手伝え！ 早く縄切れ！」

桃子「あ、はい」

舞のナイフで自分の縄を切る桃子。

舞「離せ、この変態ー！」

成田の股間を蹴りあげる舞。

成田「うぐっ」

桃子「成田さん、大丈夫ですかー？」

成田「……何で俺がこんな目に」

成田の下で泣きじゃくっている舞。

○同・前の道（夕）

パトカーに連行される舞を見つめている桃子と成田。

野次馬の中に桜井を見つける桃子。

桃子「桜井さん！」

舞「！」

桜井「脅されて監禁されていたんだって？」

大丈夫だった？」

俯く舞。

桜井「そんなひどい事する子だとは思わなか

ったよ」

舞「……」

桃子「……」

桜井「怖かったろ？」

桃子「……あの、確かにやりすぎだとは思

いますが、でも舞ちゃんの行動は全部桜井さ

んが好きだからで」

成田「……」

桃子「何か、言ってあげた方が」

桜井「何かって？」

桃子「だって、桜井さんだって舞ちゃんに服

とかご飯とか貰ってた訳ですよ」

桜井「だから？」

桃子「え」

桜井「僕が頼んだ訳じゃないし、好意をありがたく受けただけだよ」

桃子「そ、うかもしれませんが……」

舞「……」

桜井「舞ちゃんの行動と僕は関係ない」

桃子「……」

成田「……ま、そうだな」

舞「……」

警官A「ほら、乗って」

桃子「ままま待って下さいよ！」

肩に置かれた桜井の手を振り払う桃子。

舞「！」

桃子「確かに一連の騒動は勝手に女達で争ってただけです。桜井さんの意思は介在してませんよ。だけどその言い方はないんじゃないですか！」

成田「ストーカーの味方をすんのか」

桃子「違います！ でも」

舞「……」

桃子「舞ちゃんが桜井さんにあげた服もご飯も、彼女が必死でアルバイトして溜めたお金で用意したものです。お金っていうのは現実で、食べる為に必要で、労働の対価なんですよ」

桜井「だからいつも感謝していたよ？」

桃子「私達が欲しいのはそんなふわふわしたもんじゃないんですよっ！」

桜井に詰め寄る桃子。

桃子「誠意を見せろって言うてんです！」

桜井「……」

桃子「愛情を返す気がないなら断るのも誠意でしょう」

桜井「愛に対価を求める方が間違ってるんじゃない？」

唾然として桜井を見つめる桃子。

パトカーに乗り込もうとする舞。

桃子「舞ちゃん」

舞「……もういい」

桃子「……」

ポケットから桜井にもらった絵を取り出す桃子。

躊躇するが、ビリビリに破く。

舞「！」

ぐしゃぐしゃにして地面にたたきつけ、足で踏みつける。

息を荒げて舞の顔を見つめる桃子。

舞「……」

バッグからマカロンを差し出す桃子。

桃子「……目が」

舞「……」

桃子「目が前についてるのは前に進むためなんだって」

舞「……そんなの当たり前じゃん」

マカロンを受け取り、車に乗り込む舞。

成田「……」

パトカーを見送る桃子と成田。

苦笑し、公園に戻っていく桜井。

桜井の背中を見つめる桃子。

○道（夜）

成田と桃子が歩いている。

成田「悪いな。疲れてるところ、事情聴取」

桃子「……別に被害届出さなくてもいいんですよね？」

成田「アンタが出さなくても、あの子に嫌がらせされた他の女は出すかもな」

桃子「私はいいです」

成田「そうか」

小さく息をはき、俯いて歩く桃子。

桃子「職業柄、気になるんですよね。人ん家の冷蔵庫」

成田「？」

桃子「健康な精神は健康な肉体に宿ります。健康な肉体を作るのは美味しい食事です」

成田「……」

桃子「舞ちゃんの部屋、ほとんど物がなかったんです」

成田「そういえば、若い女の子の部屋にしてはかなり少ない方だったな」

桃子「きっと冷蔵庫も、何も入ってなかった
んだらうな」

成田「……」

おもむろに桃子の腕の肉を摘む成田。

桃子「ちよつと！ 何ですか！」

成田「……まあアンタなら大丈夫だよ」

桃子「は？」

成田「肉づきがいいのは幸せな証拠だ」

桃子「何なんですか！ セクハラですか」

声を出して笑う成田。

桃子「成田さんが笑うとこ初めて見ました」

成田「……」

桃子「交番にいる時ももっと笑った方が市民
の好感度もアップしますよ」

成田「……」

桃子「だいたいが悪人顔なんですから、せめ
て笑わないと。近寄りがたいんですよ」

成田「余計なお世話だ」

しばらく黙って歩く二人。

成田「……面倒くせえから泣くなよ？」

桃子「……全然泣いてません。もっとイイ男
見つかるんですから」

成田「懲りないね」

桃子「たった一人を見つけないんです」

成田「……」

桃子「舞ちゃんもきつと。美味しい物を食べて、楽しい、幸せって一緒に感じられる人が欲しかっただけなんですよ」

成田「……とか言いつつ、連絡しないと拗ねるし、誕生日やクリスマスにプレゼントしないとキレルよな」

桃子「私は本質的な話をしてるんです！ も

お、話の腰折らないで下さいよ」

ぶつぶつと小声で文句を言う桃子。

成田「（独り言）健康な精神は健康な肉体に宿る、か」

桃子「え？」

成田「……いや」

桃子「？」

成田「そういえば、あの子に言ってた『目が

前についでるのは』て何？」

桃子「ああ。私本当にネガティブなんで、尊敬する偉人達の言葉を思い出しては時々自分を励ましてるんです」

成田「ふうん。誰の言葉？」

桃子「江頭2…50」

成田「…」

○桃子の部屋（夜）

映画『アニー・ホール』をDVDでぼんやり見ている桃子。

机の上には破った桜井の絵。

桃子N「映画の巨匠ウディ・アレンも言うてる。『苦しみたくなければ恋をしてはいけない』」

絵を丸めて掴み、窓際に立つ。

夜空に輝く月を見上げる桃子。

桃子N「『でもそうすると恋をしていないこととでまた苦しむことになる』」

絵を窓から投げ捨てる桃子。

桃子「なんだこの野郎―！」

○北町総合病院・精神科・401号室（夜）

ベッドの上で疲れたように眠る明子。

やせ細った腕をさすってやる成田。

成田「目が前についてるのは前に進むためな
んだってさ」

窓の外の月を見つめる成田。

成田「次、目え開いた時は前に進めるといい
な」

○北町交番・前のバス停（朝）

恥じらうように俯いて立っている桃子。

桃子「あ、あんまり見ないで下さい」

成田「見てません」

桃子「そんなにじっと見られたら私…」

成田「勘違いしないで下さい」

交番の目の前にあるバス停に立つ桃子。

交番の入口で見張りをしている成田。

成田「あなたが目の前に立っているので自然

と視界に入ってくるだけです」

桃子「向こう向いて下さいよ！ 後ろに立たれると威圧感がすごいです」

成田「何かやましい事でも？」

桃子「あ、ありませんよ」

成田「ならばお気になさらず」

桃子「……」

バス停の列に並ぶ客が奇異の目で二人のやり取りを見ている。

視線に耐えかね、列を離れて成田の側にいく桃子。

成田「何だよ」

桃子「何となく」

成田「……」

桃子「それにしても、私職場に行くのに毎朝このバス停に並んでいたのに全然成田さんの事知りませんでした」

成田「まあ、普通そうだろうな」

桃子「でも毎日この空間で会ってたってことですよねえ。不思議ですね」

成田「……」

桃子「何か縁があるのかもしれないね」

成田「そうかもな」

意外な答えにギョツとする桃子。

成田「今度料理教えてくれよ」

目を見開き、成田を見つめる桃子。

成田「何だよ」

桃子「どうしたんですか。何か悪い物でも食べたんですか？」

成田「バス来たぞ」

○バス・中（朝）

バスに乗り込み、窓際に座る桃子。

会釈するが、成田は視線を真っ直ぐに

し、もう視線が合わない。

ドアが閉まり、バスが発車する。

溜息をつき、最後に成田を見やる。

成田「……」

桃子「！」

一瞬、目が合うが何事もなかったよう

に視線が逸らされる。

桃子「……」

走り出すバス。

へ
完
↓